

「ラグビーワールドカップ 2019」から考える、多様性の時代

校長 阿部 孝

2019年で最も話題になった言葉に贈られる令和初の新語・流行語大賞に、「ラグビーワールドカップ (W杯)」で活躍した日本代表の「ONE TEAM (ワンチーム)」が選出されました。日本代表はこれを合言葉に、強豪国アイルランドやスコットランドに次々と勝利し、史上初のベスト8に躍進するなど、日本中に大きな感動と明るい話題を提供し、我々国民に勇気と希望を与えてくれたことが選出の理由であると思います。

ラグビーについては、4年前のイングランド大会で五郎丸選手の活躍などがあり、一時は注目されたものの、野球やサッカーなど他の球技に比べるとルールが複雑であり馴染みがないため、W杯開催前はあまり盛り上がりが見られませんでした。しかし、大会が始まれば日本中が沸き上がり、大会が終わった後も繰り返し報道番組などで大きく取り上げられ高い関心が寄せられています。それは激しくぶつかり合いながらボールを前へ運ぶゲームそのものの醍醐味と、ラグビーには魅力ある多様な要素が詰まっているからです。

ラグビーは、1チーム15人でゲームを行い、ポジションとその役割が明確に決まっています。体格や体力・運動能力などによってチームとしての役割が決まられ、それぞれが個性を発揮し活躍できるのです。多少細身でも身長が高い人はラインアウトというセットプレーで高い位置のボールをキャッチしたり奪い取ったりしますし、体重の重い人はスクラムでの押し合いや密集でのボールの争奪戦などで威力を発揮します。そして、今回のW杯で活躍した田村選手のようなキックのスペシャリストもいれば、体が小さくても松島選手や福岡選手のように足が速い選手は、素早いステップで相手を振り払いトライを目指すなど、個々の優れた部分を生かしてチームに貢献するスポーツなのです。

また、日本代表のメンバーは「外国人が多いな」と度々囁かれるように、ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ、サモア、トンガ、韓国の出身など6か国の外国人選手が加わり、国際色豊かなチーム編成でした。これは、日本リーグや実業団、大学など、国内でプレーしている選手であれば、国籍の有無に関わらずその国の代表になれるというラグビーW杯独特のルールにな

っているからです。したがって、多様な個性や国籍を持つ集団だからこそ、「ONE TEAM (ワンチーム)」は心の支えで、チームを同じベクトルに結束するためのスローガンだったのです。

日本代表は、この「ONE TEAM (ワンチーム)」を合言葉に、年間 250 日の合宿を重ねて一人の力が全体の力となることを追求したとのこと。23 歳から 38 歳の異年齢の集団、しかもほとんどの選手が家庭をもつ中で、土・日以外のウィークディを合宿するというのは、W 杯に向けて相当の覚悟と決意をもって臨んだ証左と言えます。この取組みが互いの強い信頼関係と絆を深め、緊迫した局面の中でも以心伝心で日本のプレースタイルを貫き、強豪国に勝利できたのでしょうか。それはまさしく、「One for All, All for One～ひとり皆のために、皆はひとりのために～」のラグビーの精神から生まれた言葉そのものだったのです。

今回のラグビーW 杯では試合だけではなく、大会を通して人々の結びつきや特別な価値観を生む心温まる話もたくさんありました。特に「ホームゲームのつもりで戦ってほしい」と試合前に各国の選手たちが歌う国歌を地元住民と一緒に歌う取組みや、子供達がニュージーランドの民族舞踊「ハカ」を踊って選手を歓迎する取組みなどがあり、大会ホスト国 (ホストタウン) としての日本の「おもてなし」に対し、「これまでにない最も偉大な W 杯」と称賛されています。そして、これらに呼応するかのよう外国選手の行動にも注目されました。大会期間中、台風 19 号が上陸し大きな災害の爪痕を残しましたが、岩手県釜石では、カナダ代表が戦わずして予選敗退となっても直ぐには帰国せず、被災者と共に土砂や泥を撤去する光景は、世界中に感動の輪を広げました。また、サモアなど外国選手のタトゥーは、家系やルーツを表現する伝統文化ですが、日本では反社会的組織と結びつくともものと配慮し、公の場では目立たぬよう長袖のシャツを着用するなど日本の慣習を尊重した行動も報じられました。今回の W 杯に参加した 20 カ国は、それぞれの国が異なる歴史や文化を持ち、もちろん言語も人種も宗教も違います。だからこそ死力を尽くしたゲームのあとは、相手を尊重 (リスペクト) し、敵味方なく互いに肩を組んで称え合う「ノーサイド精神」がラグビーの大きな魅力なのです。

今年度は平成から令和へと新たな時代の幕開けとなりました。そして、今年の夏は 2020 年東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。また世

界中から一流アスリートが集い、ラグビーW杯同様我々に多くの感動を与えてくれることでしょう。特にオリンピックは「平和の祭典」として開催されますし、パラリンピックは障害者と健常者との「共生社会」を目指して行われますので、その趣旨や精神を尊重した大会になることを希望してやみません。また、今後我が国は極端に人口が減少し、あらゆる職種において働き手不足など社会への深刻な影響が懸念されています。そのため、外国人労働者の受け入れなど、一層国際化が進み、必然的に共生・共存の社会が形成され、国籍はもとより言葉や慣習、宗教などが異なる多様性の社会が訪れることでしょう。

こうした多様性が進む時代の中でも、「個性を生かして、社会の一員として役割を果たし貢献すること」、「子供から高齢者まで老若男女を問わず誰に対しても思いやりをもつこと」、「日本人、外国人に関わらず互いの人格を尊重し、安全で平和な社会をつくること」など・・・ラグビーW杯での取り組みや知り得たその貴重な精神が、より良い社会をつくるための考え方に繋がるのではないかと思います。次の世代を生き抜く皆さんには、時代の不易と流行の双方を大切に、社会の発展に寄与する人材として活躍することを期待します。